
食事

竹仲法順

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食事

【Nコード】

N9446X

【作者名】

竹仲法順

【あらすじ】

企画会社で社長を務めている俺は昼になると、社の近くのステーキハウスで食事を取る。朝はコーヒ一杯で済ませていて、夜は飲み屋で飲むから、食事のバランスが悪かった。そんな俺も忙しい合間を縫ってマスターが焼いてくれた肉を食べられることを秘かに楽しみにしていたのだが……。

*

お昼の時間が近付いてくる。俺は今日も会社の近くにあるステーキハウスで、食事を取るつもりでいた。朝はコーヒーだけで済ませているので、昼間たっぷり食べ、仕事が終わってから夜は飲み屋で飲む。さすがに食生活は乱れていた。俺自身、食事というものに欲求があったとしても、栄養のバランスなどはほとんど考えないものである。だけど肉類だけは誰にも増して好きだった。ステーキハウスで焼いてもらうときはウエルダンにしてもいい、しっかりと焼いてもらってから食べる。普段ずっと会社ではパソコンに向かって、た。社長室の外には社員がいて業務を行なっている。部屋にいて、パソコンのメールアドレス宛に送られてきた書類をプリントアウトし、^{つづき}具に読むのが俺の仕事だ。そして読み終わったら採用の可否^{かひ}な^を判断していた。ここはビルの一室を借り切った部屋で部下たちが二十名ほど机を並べ、ワンフロアに詰めている。企画会社というのはとても地味なところで、下の人間たちはずっと日長一日パソコンのキーを叩き続けていた。俺もさすがに平の人間たちが常に情報^{かひ}の最前線にすることが分かる。それだけ新鮮味のある企画が多い。一口に企画と言ってもピンキリなのだが、実際面白いモノに関して採用し、その手の専属の営業マンたちがいろんな場所に売り込みに行く。単に企画書をコピーし持っていくのだ。一々どうのこうとは言わない。社でも企画部にいる人間たちは大概、テレビのCMやラジオ番組でオンエアされるネタ、それにネット上で流すオンライン番組などの企画を手掛けている。そういったことを敏感に考え付くのだ。さすがに若さというのは特権なのかもしれない。俺も昔のものはよく知っていても、トレンドにまともに付いて行けないところがあったのだし……。だけど所詮、企画書通りにモノを作るのは業界の人間たちである。こっちから口出しは出来ない。企画が通

り、完成すればスポンサー料などを通じて利益を回収するだけなのだから……。

*

「中嶋さん、何かあったんですか？浮かない顔してますよ」

ステーキハウスのカウンター席で頬杖を付きながら肉が焼けるのをじっと見つめていた俺に、目の前で焼き続けているマスターが言う。グラスのお冷を軽く啜りながら、

「別に何もないよ」

と言い、仕事のことをあれこれと考え続ける。あの案件の処理は終わったのか、こっちは件は処理したのか、などをだ。ずっと頭を巡らせていると、マスターが、

「飯食うときぐらい、考えるの止めてくださいよ。せつかくの食事が台無しになるでしょ？」

と言つて笑顔を見せた。フーと吐息をつき、

「そうだな。俺も考えすぎるところがあつてね。悪い癖なんだ」

と返す。マスターは焼き上がった肉の裏表に塩コショウし、味付けをした後、大きめの皿に載せて差し出した。分厚い肉は十分焼けていたので、ナイフで切つてフォークで突き刺し、口へと運ぶ。食事の時間は案外淡々としている。多少気に掛かることはあつたとしても、料理はちゃんと喉を通るのだ。合間にマスターが別の客の注文したステーキ肉を焼き始める。見たところ、頭にはだいぶ白髪が混じっていた。おそらくかなり苦労しているのだろう。夜も眠れないようなこともあるようだったし……。

「マスター、何か飲み物くれないか？」

「コーヒーお淹れしましょうか？」

「ああ、頼んだよ」

いつもマスターはエスプレッソのコーヒーを淹れてくれる。しかもブラックで、だ。砂糖やミルクを一切入れないことを知っていたのだから……。ゆっくりと手元の料理を食べ続ける。さっきまであった葛藤はもうなかった。確かに日々疲れを覚えるのだが、そうい

ったときは出来るだけ考えるのを止めにする。会社では社長室にいられて、コーヒーもコーヒーマーカーから注げば飲み放題だ。別に俺自身、仕事のことでどうのこうのと悩み続けることはないだろうと思っていた。確かにサラリーマンをやっているといろいろある。だけど考えてもしかたないことなどいくらかでもあるのだ。実際問題、どうしようもないことが山積するのが会社なのだし……。こんなことは会社員じゃない人だって有り得る。別にどうでもいいのだ。単に日々仕事量が増えるのだけがネックだった……。*

料理を食べ終わり、皿にナイフとフォークを置いて、口の周りをナプキンで拭った。そして注がれていたコーヒーを飲み干し、立ち上がる。マスターが、

「今日も食べに来てくれてありがとうございます」と礼を言った。

「ああ、また食いに来るよ。少しでもマスターの懐が潤えばいいからね」

「嬉しいですね。そう言ってくれると私も料理の作り甲斐があるんですよ」

「また美味しい肉食わせてくれよ」

「分かってますよ。いつでも来てくださいね。ランチタイムは午前十一時半から午後二時までですから」

マスターがそう言うのと、俺が歩き出す。レジでカードを提示し、決済してもらつ。月に一度昼食代がクレジットの口座から自動で引き落とされるのだ。食事代を清算し終わり、ゆっくりと歩いていく。お昼を取り終わったのでお腹が満たされ、気分もよくなる。時計を見ると午後一時前だ。これから社に戻り、また引き続き業務をこなす。おそらく企画書を読むことに没頭するだろうと思う。けどつまらないようでもこれが俺の日常だ。社のトップとして、部下たちが打って送ってきた資料を読むだけである。ボツになる企画もちらんあった。全部採用するわけじゃない。大抵企画会社の企画は半

分が三分のぐらい通れば上々なのである。後は一切ゴミ箱行きだ。くだいようだが、企画書に基づいてタレントや俳優、お笑い芸人などをサポートするのが俺たちの仕事なので、CMや番組などに出演する際はスポンサーを通じて高額のギャラを渡し、全て入念な打ち合わせをしてから作っている。

*

帰社してフロアに入ると、社員たちも食事を取り終わったらしく、午後の仕事をしていた。午後の方が仕事がかどることが多い。どうしても、こういった会社の社員は皆夜型になってしまう傾向が強いので……。朝起きるにしても疲れが溜まっていて辛い。だけど出社してきて、フロア内にあるコーヒーマーカーでコーヒを淹れ、飲む。眠気を吹き飛ばしてからパソコンのキーを叩く。業務は全てメールで行なっていた。会議はあるのだが、集まるのは社長である俺とフロアの主任、それに副主任の合計三人だけだ。社長室の隣の会議室で会議をする。この季節はどうしても空気が乾燥していて喉をやられやすい。皆ミネラルウォーターのペットボトルを持っていた。そして会議が終わったところで、話を整理する。そのために会議中も無線式のノートパソコンを開き、じつとディスプレイを見つめていた。大概会議は午後三時過ぎぐらいから開かれ、午後五時前には終わる。散会后、主任と副主任はフロアに戻り、俺も社長室に入って終業時間まで業務をこなしていた。もちろん会議で出た発言は全てパソコンに打ち込み、フラッシュメモリに落としていたので何も困ることはない。企画会社の社員の一日はあつという間に終わってしまう。と言うか、サラリーマン自体、実に単調なのだ。俺も長年この業界にいる。裏も表も知り尽くしているのだった。そしていつもあのマスターがいるステーキハウスで食事を取ることに楽しみになっている。毎日昼になると、あのサーロインステーキを食べられることが無上の喜びなのだ。何にも増して。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9446x/>

食事

2011年10月26日14時58分発行